

音の散歩路



～九段から日比谷・昭和の風音を聴きながら～

地下鉄の九段下駅の4番出口から地上に顔を出すと目の前に昭和館がそびえている。(写真-1) 戦中・戦後の生活の労苦を伝えるために平成11年3月に開館した。7、6階の常設陳列室では「母と子の戦中・戦後」をテーマに実物資料から当時を偲ぶことができる。5階が映像・音響室になっており、タッチパネル式の情報端末で検索すると当時の流行歌、童謡、浪曲、物売り、祭り、演説など様々な音響やニュース映画を鑑賞できる。端末の小さなスピーカーから流れ出てくる戦中の朝日ニュースの音声は、甲高く、緊張し、世相を色濃く反映している。尚、4階は図書室で文献や生活記録、手記などを閲覧できる。

昭和館を出て九段坂を少しのぼると左手に北

の丸公園の入口がある。(写真-2)門をくぐり、武道館、科学技術館の前を通って皇居東御苑に向かって歩く。首都高速の上を横切り、大通り

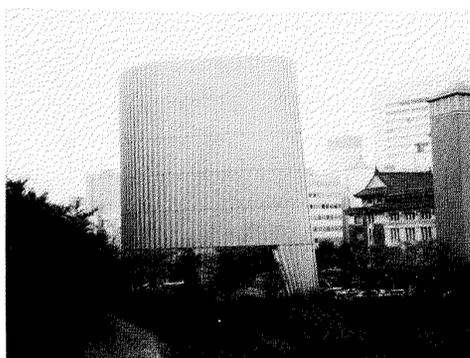


写真-1

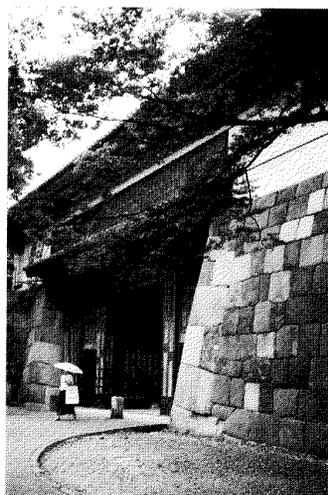


写真-2

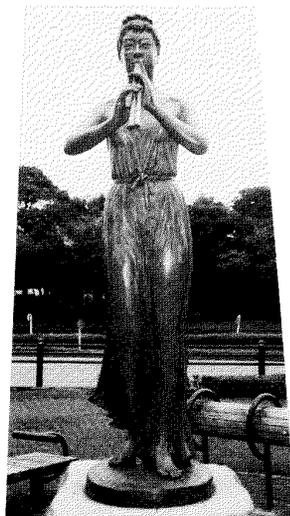


写真-3



写真-4

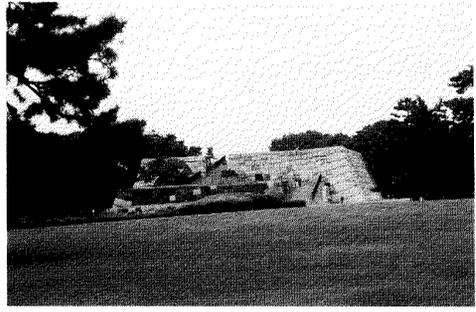


写真-5

にぶつかると右手方向に楽を奏する乙女の像が見えてくる。(写真-3)

大通りを横切れば皇居東御苑の入口である北きた桔橋門はなばしもんがある。皇居東御苑は旧江戸城の本丸、二の丸、三の丸の一部を庭園として整備したものである。乾濠を右手に見て橋をわたる。(写真-4) 本丸跡の芝生広場を前に、残された天守閣の石垣が威容を誇る。(写真-5) 1638年、三代将軍家光の時に国内で最も大きな天守閣(地上高58メートル)が完成した。しかし、わずか19年後の振り袖火事の飛び火により全焼してしまい、以後は再建されることはなかった。町から遠く離れた天守まで巻き込んだ猛烈な火勢は空前絶後のものであったであろう。天守の石垣に向い合って桃華楽堂とうかがある。(写真-6) 香淳皇后(故皇太后さま)の還暦を記念して1966年(昭和41年)に建てられた音楽堂である。その裏手には宮内庁の楽部があり、散策していると笙の音が聞えてきたりする。



写真-6

この他にも、東御苑には松の大廊下跡(写真-7)、百人番所(写真-8)、同心番所(写真-9)など江戸の昔を偲ばせるものがある。

さて、大手門を出て地下鉄に乗り、大手町からすぐの日比谷で降りて日比谷公園に向かう。日本初の洋式庭園として明治36年に開園した。昭和の音楽の殿堂であった日比谷公会堂や野外音楽堂でのコンサート(写真-10は東京消防庁音楽隊の演奏)、或いは竖琴を持った自由の女神



写真-7



写真-9



写真-8

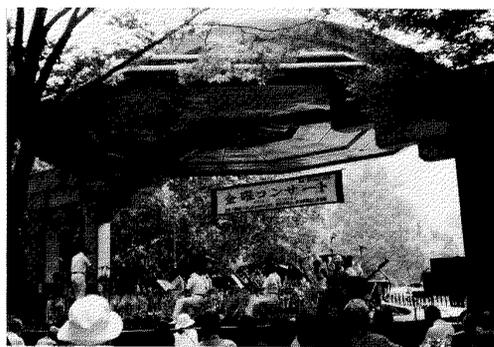


写真-10

像(写真-11)など音楽にゆかりのものが多い。

ところで、公園内に小さな山があるのをご存知でしょうか。テニスコートの裏手に位置する三笠山である。(写真-12)公園造成時に池などを掘った残土で作った人工の山である。その山に足を踏み入れると薄暗い木立の中に自由の鐘が不意に姿を現わす。(写真-13、表紙の写真)

表舞台から忘れ去られた様に、周囲にホームレスとおぼしき人が数人散在するだけだ。しかし、それは立派な鐘である。見入っていると高らかに鳴り響く様な感覚にとられる。

この他にも公園内を散策すると、何気なく道脇に置かれた南極の石(写真-14)や石貨(写真-15)、或いは旧公園事務所(写真-16)など

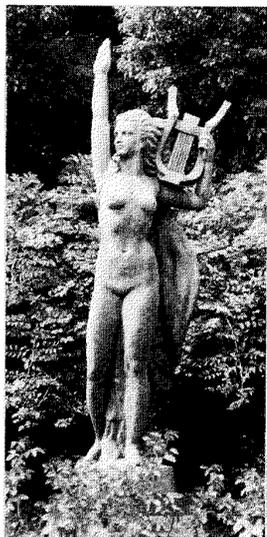


写真-11



写真-12

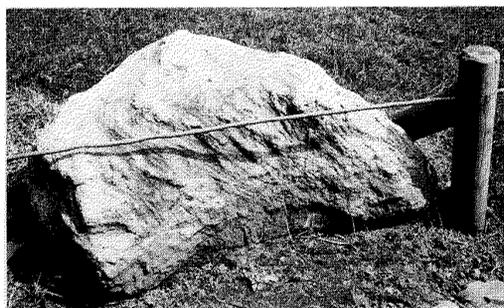


写真-14

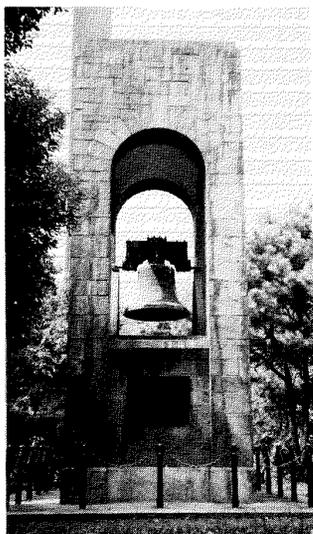


写真-13

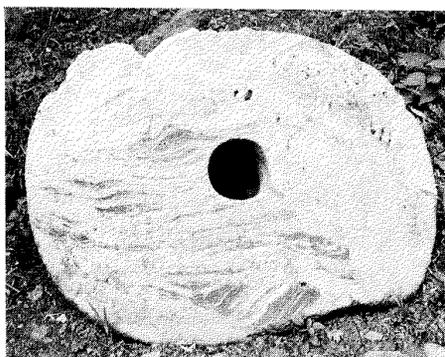


写真-15

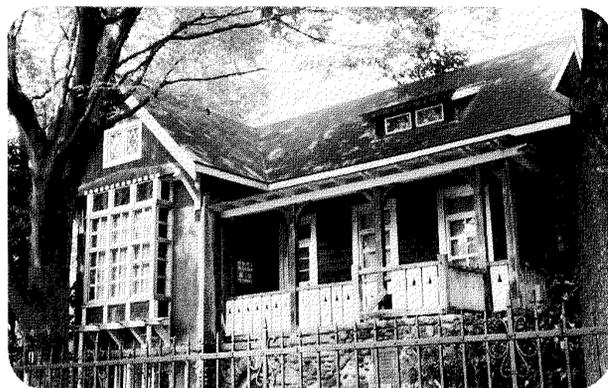


写真-16

興味深いものに遭遇する。旧公園事務所は明治43年に竣工し、当時としては極めて斬新なドイツ・バンガロー風のデザインを採用している。震災や戦災でも損傷せずに今日まで生き延びた。

～九段から皇居東御苑を経て日比谷へ～東京の中心部でありながら、時間が止ったような空間を、昭和の音を感じつつ散策できる貴重なコースである。(財団 江沢記)

●昭和館問合せ先 TEL 03-3222-2577

<http://www.showakan.go.jp>

休館日：月曜（休日の場合はその翌日）

・年末年始・3月31日

●東御苑問合せ先 TEL 03-3213-1111

03-3213-2050（土・日の連絡）

休園日：月曜・金曜・年末年始・行事予定日